外国語教育の実践

守谷市立守谷中学校

1　はじめに

今年度は，新たに市内統一の CAN-DO LIST が作成された。また，それに伴った”Moriya Communication Challenge”の取り組みも各校で開始され，英語科教育として新たなチャレンジの１年目となった。

2　具体的な実践内容

（1）Moriya Communication Challenge

各学年で共通した活動として取り入れた。この活動は前述の CAN-DO LIST に密接に連携しており，これに取り組む事によって，英語学習にとって必要十分な重要表現を身に付けることができる。各単元末のタイミングで JTE・ALT・支援ティーチャーの３人体制で個人指導及びチェックを行った。取り組みの初年度ということもあり方法については試行錯誤しながらより効率的・効果的な指導方法を研究中である。

（2）第１学年の取組

第１学年では，昨年度に引き続き，小中接続期という段階を意識した活動を中心に取り入れた。年度始めの導入期では，Phonics を積極的に導入した音と文字との連結作業に力を注いだ。昨年度の終わりから市内全小学校で Phonics を段階的に取り入れる試みが開始された。英語に慣れ親しんできた子どもたちが，最初に出会うハードルが英語の音を文字化することであるということは近年の中学校初年度の英語教育の壁の一つとして問題視されてきた。そこで Phonics を用いることにより，英語を書く活動にスムーズに移行できることを目的としたこの取り組みは，必ずこれからの子どもたちの学習を力強く支えていくことであろう。更に Super Input を用いた基本文の徹底的な習得活動を徹底して行った。第二外国語の習得は単に「楽しい授業」を行うだけでは困難である。そこにはある程度以上の反復練習が必要であると考えられる。単元毎に基本文と本文中の重要英文を何度も繰り返し音読練習と筆記練習を，口と手になじむまで徹底して行った。また ICT 教材を開発し，軽快な８ビートに乗せて何度も練習することは，英語特有の正しいリズム感を身に付け，そして，反復練習のモノトーン化を防ぐ意味でも有効である。

（3）第２学年の取組

第２学年でも同様に，Super Input を用いて基本文・重要表現を身に付ける活動を行った。またＪ２レベルを中心とした Moriya Communication Challenge の対話表現を用いたペアチェックを行ったり，定期的に個人ごとの発音チェックや簡単な英作文テストを授業内に行ったりした。また，英語力テストで Super Input のチェックを行いながら，基礎学力の向上を図った。さらに，読み物教材を中心に EL（English Leader）を軸としたグループ学習を行った。また，この学年で昨年度の終わりから取り組み始めた， Shadowing を中心とした Reading 活動や，summarizing を取り入れて，単元を貫いた内容理解にも挑戦してきた。

（4）第３学年の取組

第３学年では，これまで活動に加え，英語学習の集大成として，Moriya Communication Challenge のＪ３レベルと中心とした自己表現活動に力を注いだ。Show and Tell や 日本文化紹介，将来の夢，賛成・反対の意思表明などの多岐にわたるテーマについて何度も繰り返して取り組んだ。また，単に正確な文法を駆使するだけではなく，”Head”,”Body”,”Foot”といった三段階の文の構成や，ロジックをしっかりと意識しながら英文を完成させることに指導の焦点を当てた。

3　成果と課題

Moriya Communication Challenge はそれ単体ではなく，Super Input や英作文活動など組み合わせることにより，更に効果的な学習成果を生み出す可能性を感じた。生徒にとっても義務教育での英語学習のゴールをしっかりとイメージすることができる。この先進的な取り組みを更に有効活用できるように，他校の英語科職員との連携も図りながら，指導法や活用法について今後研修を重ねていきたい。